

東北震災ツアーレポート現地を訪問して思うこと

訪問先福島県会津東山温泉コース

今回のツアーの主な目的は風評被害についてであった。今回の地域は目で見える被害は少なく風評被害が主であったということで、目に見えない分なかなか理解してもらえないのではないかと感じた。リンゴ園や農産物業者を訪れて話を伺ったが、福島産というだけで風評被害を受け、地震・津波・放射能に加えての四重苦にあっている状況にたいして返す言葉もなかった。そのような状況にありながら、何とか立て直していつている姿に感銘を受けた。我々に今できる事は、福島に行ってきたけれど食べ物やフルーツは大丈夫だったよと言い伝える事だと思った。

また、夜の地元校友との交流会で印象的だった話として、まず被災者同士の中で軋轢が始めたことについてであった。農家の人で作物が売れなくなり生産意欲を失い、自ら働かなくなりパチンコなどして補助金を貰い続けている人が増えているとのこと。そして一方ではコツコツ働いている被害者がいるということ。これには複雑な気持ちになった。これも地震がなかったらという思いであった。また、子供たちが将来は福島県人同士でないと結婚できないと思っていること、福島県出身というだけで差別を受けているということにも衝撃を感じた。

前にも書いたが今回のテーマである風評被害は目に見えないことのため、理解してもらうのは本当に難しいと感じた。やはり現地に行って話を聞くことの大切さを感じた。今回のツアーで感じたのは、立命館大学卒業というだけで、被災地を訪問したい校友がこんなにいたことをうれしく感じた。そして校友会単位でなく個人個人で参加していたこともとても良かった。さすが立命という感じであった。被災された校友とお話しさせていただき感じたことは、まず「福島の現状を伝えてほしい」ということであった。風評被害の大きさやまた福島は大丈夫だということを伝えてほしいということであった。今回のツアーは合計4回であるが、今後行うべきではないかと思う。形は変えても、復興の目途が立つまで震災を風化させないためにも行ったほうがよいと考える。まだ震災地に行きたい校友がいるだろうし、一度行ったことがある校友も再度同じ地を訪れて、どの程度復興したか確かめたいと思っている校友もいると思われる。このような活動をおこなっているのは立命館だけである。しばらく経費が掛かって続けてほしい。被災地の校友や被災された人々から将来立命は素晴らしいといわれるよう有形無形の援助をぜひ検討願いたい。

初村雅敬